
とある科学の一時停止(サスペンド)

目黒 良輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある科学の一時停止
【著者名】

日黒 良輝

【Zコード】

Z8610Z

【あらすじ】

上条が学園都市最強の超能力者・一方通行との死闘の時、学園都市の闇では一方通行に似た能力と容姿の少年・一時停止が動いていた。触れた物体の向き（ベクトル）を停止させ干渉、掌握出来る能力を持つ一時停止の物語が始まる！！

第一章 壊滅任務 Annihilation duty(前書き)

小説初投稿です、と言いたい所ですがこれで二度目位です。
頑張つて書いたのでは是非読んで下さい。

「さあパーティーの時間だムシケラ共」
裏学園都市第一位 一時停止サスペンド

第一章 壊滅任務 Annihilation duty

「」は第四学区。学園都市でも数多くの料理店が並ぶ場所で、食品に関する施設も多い。

無能力者の武装集団・スキルアウトとはまた違つ無能力者の集団のアジトがこの学区の食品を保存する冷凍倉庫を改造している。このような場所に大抵そのようなアジトは作らない、つまり死角となっているのだ。

今は午後9時頃、大抵の学生はもう寮にいないといけない時間であり行き交うのは帰宅する大学生や学校の教師が多い。

そんな中、黒い学ランを着た断髪の少年は息を切らしながらある冷凍倉庫へ向かう。少年の手には学生カバンがある。

少年が冷凍倉庫に入るとまず感じる寒さが伝わらない。少年は不可解に思いながら奥へ踏み入る。

奥には男女合わせて20人程度の学生が騒いでいる。ある男は未成年なのに缶ビール片手に携帯を弄^{いじ}っていたり、ある男女は煙草^{タバコ}を吸いながらこつ騒いでいたり、ある男女は大人の育みをしていたりと健全な人達に害を及ぼすような行為をしている。

少年は拳銃不審に奥へ進むとある部屋への扉を見付ける。少年は躊躇^{ちよ}いなく扉を開ける。そこには縁髪でシンシンな頭をしている青年

が社長室にある椅子に腰掛けた。少年はゆっくり青年に近付くと学生カバンを青年の前にあるテーブルにゆっくり置く。

「手に入れました……。これが幻想御手レベルアップです……」

「でかしたな。晴れてキミも俺達グリフィスの仲間入りだ」

青年は笑みを浮かべながら拍手をする。少年は次第に口元が上がり

「あ、有り難うござります帝王様……！」

「いこいつよ。ところでお、キミ童貞っ。」

「は、はあ……」

少年は曖昧な返事を返すが帝王は軽く手を鳴らすと奥から半裸の美

女達が現れる。

「アイツまだ新品だからよおテメヒ等の好きにしちゃつていいからあー！」

「イエーイ」「坊や楽しい遊びをしましょ」など少年に迫り犯されていいく。

帝王は犯される少年の模様をにやけながら見ている。しかし、後に大惨事が起きる事をまだ知らない。

同時刻、ある少年も第四学区を歩いていた。少年はスライド式の赤い携帯を耳に押しあてながら歩いている。

『今回は第四学区の冷凍倉庫をアジトにしている無能力者集団グリフィスを壊滅する事だ』

「毎度毎度オレは何時もそのような事しかないのか？」

『統括理事会の護衛とかしたいのか？君はそんなの正に会わないだ
ろ一時停止』

少年・一時停止は電話の相手に珍しく同意する。彼自身、護衛とか
守るのは肩身が狭い感じな為不向きだと自覚している。最も正に会
うのはこのような人の排除か破壊ぐらいだ。

「反論が出来ないよ。よく読んでるな梶原さんよお」

電話の相手・梶原はフツと鼻で笑う。

『何年君の任務を依頼しているのか分かるかい？君の好き嫌いは馴
れたので』

「そりゃどうも」

一時停止は話の件くだりが過去の方へ行くと思い通話を切りポケットにし

まつ。そういうじている内にグリフィスのアジトである冷凍倉庫に到着する。

一時停止はハアとため息を吐きながら

「さあパーティーの時間だムシケラ共、

一時停止は冷凍倉庫の入り口付近を触れると一気に前方に吹き飛ぶと同時に粉々に砕け飛ぶ。少し規模の大きい事をした為か今までしばいでいた男女は全員、一時停止の方へ向く。

「パーティーはお終いだぜ」

一時停止は辺りを見渡し未成年の違反行為を見てハアとため息をすると頭を抱え

「ここの年で大人ぶるなんて楽しいのかあ？」

男女は一時停止を見て驚愕している。実際は一時停止とは知らない

が諸事情の問題である人物に見間違をしていっているのだ。

「あれは……^{アクセラレータ}一方通行？」

「学園都市第一位の超能力者が何故この場所に！？」

驚く少年少女達の中で逆立つた金髪でガタイがいい男が一時停止に近づき

「一方通行か何だか知らねえがテメエが来る場所じゃねえんだよ」^{アクセラレータ}

ガタイがいい男は一時停止の胸ぐらを掴むが掴んで数秒後、ガタイがいい男はバタリと倒れそのまま動かなくなってしまう。

「バカだな。人の能力を知らずに触れるから悪いんだ」

少年少女達はガタイがいい男を見てガタガタ震え出すと叫び声を上

げて逃げ出そうとする。

「オマエらは此処で人生終了だ……と言ひてエガ、無駄な命は留めてやンよ」

一時停止は右手を構え軽く握る。すると少年少女達の呼吸が一気に止まつていぐ。止まつていない少年少女達はバタバタと倒れしていく仲間を見て愕然としている。

「なつー?……なんで……」

「簡単な事だ、テメエらの呼吸を停止させてんだよ。ついつても分かんねエよなアどうせ」

一時停止が能力を説明する前に全員呼吸が止まり全員が倒れている。
それを見た一時停止は軽く鼻で笑い

「自業自得だボケ」

一時停止は倒れた少年少女達を無視して奥の部屋へ進む。そこには学ランを着た少年しかいなかつた。

「何してんの?..」

「あつ 一方通行ア！？」

一時停止は毎度毎度間違われる為馴れてきたが流石にイラッと来た
一時停止はチツと舌打ちし

「オレは 一方通行じゃない。只似てるだけだ。それより帝王って言
われてる奴は」

「アヤシイことあるザバア」

後ろから声が話された為、直ぐ様後ろへ振り返る。そこには緑髪のツンツン頭の青年が立っていた。

「君がグリフィスの首領あたまの帝王か？」

青年・帝王はハハハッと弱者をあざけ笑うような笑いをすると倒れている少年の頭を踏み付け

「そりだよ。てか、人の駒をこんなにしてさ正義のヒーロー気取り？笑っちゃうね」

「オレにヒーローっていつ綺麗な言葉は合わないぜ。しいて言つたら悪魔だな

「ヒーヒーヒー」つや面白いなあ。まあ悪魔とかヒーローとか関係ないけどねえ？

帝王は一時停止の目をじっくり見ながら間合いを計っている。一時停止はポケットに手を入れると

「美学が足りないな。こんなん帝王になつたと思つてんのかア？」

「思つてゐるよ。何故なら」

帝王は両手を広げると周りに倒れている少年少女達がムクツと立ち上がりゆつくり一時停止に近づいてくる。

「精神系能力者か……」

「僕の能力は『電磁支配』僕の下にいる人は全員僕の支配下に置けるのさ。たとえ仮死状態でも脳に直接に信号を送れるから関係ないんだ」

「人を操つて王様気取りとか頭逝かれてんじゃねエのか?そん位で勝ち跨つてんじゃねエよポンコツ」

「うるせーーー。」

帝王は軽く何かを口づむと少年少女達は一時停止に襲い掛かる。
しかし

「オマエは学習能力がないのかア？」

襲い掛かる少年少女達は一時停止に触れる手前でがつりつと固まつ
ている。それはまるでテレビの一時停止に近い状況だ。帝王は軽く
冷や汗をかきながらも堅い笑みを浮かべ

「ホントめんどくせH仕事させがつて……壊滅つて言われたから
よ。オマエ……」

「死ね」

一時停止は辺りの床下に落ちてゐる鋭利なガラスの破片を拾い帝王

に向け投げようとする。

しかし、洗脳した少年少女達を前に来させ自身を守る壁を作り。一
時停止は仕方なく帝王とは全く別な方へ向け投げる。その姿を見た
帝王はガハハハと笑い

「人を盾にされちゃ攻撃出来ないんですか？」

「やはりオマエはボンコツだなア。オレの能力は触れた物体を停止、
それを掌握・干渉出来るんだぜ。オマエがオレにコイツらで攻撃し
たお陰で、コイツらの操作を停止出来る。しかし、オマエの能力は
エレクトロマスター
電撃使いの派生系でよかつたぜ。オマエは脳に微弱な電磁波を送る
事で神経の伝達を操作したつづつ事だったとはな」

すると盾になっていた少年少女達はバタリと倒れていく。防ぐ術がないが投げたガラスは自身に当たらない方向へ投げた事に気付いて
やけ

「だが、あのガラスを飛ばしたのは誤算だったなあ。当たんなきゃ
オレを殺せないぜ、適当に投げちや意味ねえよ」

勝ち誇ったように話を進めるが一時停止は軽く頭を抱える。頭が痛いわけではない、帝王の推理力に呆れているのだ。

「やはりオマエはポンコツ以下、クズだなア。オレの投げたガラスにはもう干渉済みだ。後ろ見れば分かる」

帝王は後ろを振り返る。そこには空中に無数のガラスが宙に浮いていた。一時停止の能力である触れた物質の向き（ベクトル）を停止させ干渉、掌握出来る事。それは自身が持つ物質も干渉、掌握出来るという事になる。

その理由から一時停止が放つたガラスが空間で止まる事が分かる。それを見た帝王は驚愕した顔へ変化し

「絶望を味わえポンコツ王様」

するとガラスは帝王にめがけて真っ直ぐ飛んでいく。避ける術がない帝王はガラスの破片を背中で受け止め、口からは吐血が吐き出される。背中の痛みに耐え切れず片膝を付き一時停止を睨み付ける。

「結局……君は……何者なんだ……」

薄日で開いてる帝王の瞳を見ながら

「オレは裏学園都市の第一位の一時停止。名の通り身体に触れるあらゆる向き（ベクトル）を停止、それを干渉、掌握する事が出来る超能力者だ」

「超能力者…………八人目だと…………」

帝王は意識が途切れその場に倒れる。背中からは深紅の液体が今も流れている。一時停止はチッと舌打ちすると学ランの少年に近付くと学ランを掴み

「今日はグリフィスの壊滅だつたから見逃してやるが次にオレと会つたら命はねえからな。人生こんな変な場所にいねえで平凡な世界で暮らしてな」

手を離すと少年は逃げるよつよその場から離れていく。それを気にせず踵を返し道路に出ると携帯が震えだす。携帯を取り出すと『登録1』とかかれている。通話ボタンを押し耳に当てるときの声が聞こえる。

『任務は終わったみたいだな』

「ああ。首領以外は殺してねえがいいよな」

『まいい。今日は終わりだ。家でゆっくり休んでくれ』

梶原から切ると一時停止はポケットにしまい薄暗い夜街を足音をたてながら歩いていく。

第一章 壊滅任務 Annihilation duty(後書き)

前回と言つがダメな小説を読んでくださつた方はお久しぶりです。
初めて読む方は初めまして。

田黒です。

今回の作品は私が11月に書いた作品『ある科学の一時停止』を
訂正、編集させた物語です。

11月の時期に書いた時は能力も滅茶苦茶で展開が早いも何ので視
聴者さんに迷惑をかけました。

まだそのような事が残つていて理不尽な展開や一時停止のムチャク
チヤな能力に付き合つて下さると有り難いです。

「何だか知らねえが能力者に喧嘩売るとはイイ度胸してんじやねえ
か。」

裏学園都市第一位

一時停止サスペンド

第一章 襲撃と過去 An attack and the past

グリフィスを壊滅してから数時間が経ち午前1時過ぎ。第四学区から歩いて帰ってきた為かもう深夜になってしまっていた。一時停止は夕飯を食べていなければいかずお腹がすいた為第七学区のあるコンビニに立ち寄りミートソースと炭酸飲料を購入すると再び夜街を歩こうとするが

「よお、こんな時間まで遊んでるとかいい根性してんなあ」

「選択肢は一つだ。財布を渡さずボコられるか財布を渡してボコられ

「一時停止の前に現れた数人の少年達はヘラヘラと笑いながら近づいてくる。一人目が喋りだと一時停止は近くにあった石ころを右に蹴り飛ばし自身の能力で石ころを停止させ二人目の少年の顎へ当たる方向へ飛んでいく。そんな事に気付かなかつた少年は石ころを直撃するとアッパーを食らつたように放物線を描いて飛ぶと氣絶してしまう。

「野郎……調子に」

少年達の坊主の少年サスベンドが一時停止サスベンドに触れようとすると触れる直前に止まってしまう。一時停止は片目を瞑りながら

「何だか知らねえが能力者に喧嘩売るとはイイ度胸してんじゃねえか。だがな、喧嘩を売った相手が悪かつたなオマエ達の仲間を簡単に殺す事が出来んだ。コイツを殺されたくなねえなら理由を説明しろ。は自分では言いたくねえがオレはある奴に似てるって言われてんだ、この姿を見て分かるよな?」

その後、少年達をその場で正座をさせ理由を聞いた。どうやら、学園都市最強の超能力者・一方通行アカセラレータが無能力者に負けたという噂が流れたらしく今なら勝てるかもしれないと襲い掛かったらしい。

(つたく、学園都市最強の名が廢つてんな)

一時停止サスベンドは頭を搔きながら少年達を立たせる。少年達は逃げるようその場を後にする。実際、本当に学園都市最強の超能力者が無能力者に負ける事が信じられなかつた。

一時停止は無意味な情報に頭を抱えながら自宅へ向かう。一時停止は第七学区にあるマンションに到着すると七階までエレベーターで上がりある一室に入る。そこは上層部から支給された最大限に暮らせる空間だった。軽く個人的な物もあるが。

一時停止はテーブルにミートソースと炭酸飲料を置くとシャワー室へ向かい服を脱ぎシャワーを浴びる。肌に丁度いい温度のお湯を浴びながら一時停止はふと思う。

(オレって正式に超能力者になれないのか?)

毎回思う疑問だがついつい出でしまう。一時停止はその疑問を忘れるかのように身体を洗いシャワー室を出る。

新しい服に着替え時計を確認する。時刻は午前4時、完全に朝を迎えていた。

買ったミートソースを朝飯にするのもいいだろうと電子レンジで温めると蓋を開けプラスチックのフォークで絡め取り口に運ぶ。それを何度も繰り返し炭酸飲料を開けトマトと肉の味がこびり付いた口を爽やかなグレープで綺麗にする。そして再びフォークで絡め取りミートソースを頬張る。

ミートソースを食べ終えると「」袋に食べ終えたフォークと皿を放り込み炭酸飲料を冷蔵庫にしまつとベッドに寝転がり普通の人は起きる間に目を瞑り夢に落ちていく。

*

学園都市にしては広大な土地が存在する。その土地の真ん中には全体が白に染められた建物がぽつりと建っていた。

第3能力開発施設。

この施設では学園都市に来た子供が、能力者の素質があるかないかを調べるためにある。

そして今日も能力開発を行う子供が来た。とある少年もその中にいる。

「僕は強い能力者になるんだ！！」

少年は白衣を着た女性を見ながら言った。

「強くなるのはいいけど喧嘩はして欲しくないなあー

女性は機会仕掛けのベッドに寝ている少年に向つ。

「喧嘩はしないよー、お姉ちゃんを守るんだよーー。」

「乐しみだわ、とまづ女性。

「やうやく始めるだ！」

男の声が聞こえて、慌てて少年に脳波を計るための機械を頭に装着

わかる。

「じゃあね」

笑顔でどこかに行く女性の姿は、忘れられなかつた。

この後の出来事で、本当にやつならをする「ことなるとは知らずに……。

数時間が経つた頃、施設に耳障りな警報音が鳴り響く。

「一号機から五号機に異常が発生しました！」

研究員が叫ぶ。

「脳波に以上が起きています！！」

「心拍数が上がります……危険ですよ」

「これ以上は無理です」

次々に発生する事態に研究員のリーダーは

「続けます」

冷たい一言だった。しかし、それに異議を唱える者がいる。

「それじゃあの子達はどうなるんですか!」

女性は抗議をしたが中止にしてしまう。その時の少年は変な夢を見ていた。

何もない闇の空間。

少年は孤独だった。頭が痛い。

(お姉ちゃん助けて…)

頭痛の中で少年は光を見た

そして少年は無意識に光に向かって腕を伸ばす。

ピ――――!

研究施設に無情にも、残酷な音が響いた。能力開発の失敗。
男女合わせて五人の子供の死亡が確認された。女性は自らの無念に
泣いている。

「子供の遺体はアンチスキルに連絡をして引き取つてもう」

研究員のリーダーはまるで何事もなかつたかのように呟いた。しかし、その直後だつた。

ピー、ピー、ピー

絶望に満ちた空間に再び音が鳴り響いた。

「き……奇跡です、一人の少年が生きています！」

一人の研究員が動搖の声を漏らすと、他の研究員達がざわめき始めた。そして

第3能力開発施設は謎の爆発を起こした。

アンチスキルが到着した時には施設の形どころか、残骸すらなかつた。幸いにも広い土地のおかげで、被害は施設だけで済む。

少年は廃墟となつた場所にただ1人立つていた。少年は知らぬ内に瞳から涙が滴り落ちていた。少年は残骸の中にあるネームプレートを見て。それはあの女性のネームプレートだつた。

*

目が覚めベッドから起き上がる。瞳から涙が出てこることに気付くと直ぐ様拭き取り

(またあの夢か……。思い出したくねえ過去を払拭するモノじゃねえな)

寝癖をつけながら携帯を見る。時刻は午後1時32分、時刻を見た後洗面所で寝癖を直し歯を磨く。磨き終えるとソファーに座りテレビを点け見ていると携帯が震えだす。通話ボタンを押し耳に当て

「今日は何だ?」

『まあ任務の内容と話したい事があつてな』

梶原は淡々と喋る。それを無言で聞く一時停止。
カスペハナ
アズベハナ

『まずは任務の内容からだ』

どうも、田黒です。

今回は一時停止の自宅や食生活、過去を描きました。
サスペンド

過去と言つても前作の序章と同じ過去です。今回は戦闘回ではなかつたのであまり戦闘描写を書いていませんがご不満があると思いますよね……。

次回は梶原が最後に言つた新たな任務についてです。

引き続きお読みになつてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8610z/>

とある科学の一時停止(サスPEND)

2011年12月27日20時56分発行